12 月 10 日
職員朝礼校長より 6

今日は「前提を問え！」の続きです。
実は前提を問うことなどさしあたり人間にはできないんです。
相手の話を聞くときにはまず相手の前提に乗っからないとそもそも相手の話を聞けません。
ですがそれだけでは本当に相手の話を聞いたことにはならない。
「あなたのことが嫌い！」。この言葉をそのまま受け取ることはできませんね。
相手の話の前提は本人にも気付かれていないことが多い。
そこを聞く。それが前提を問う、ということだと思います。
教科書でも何でもそうですが、まずは前提に乗っかって理解する。
そうしてからその前提を問う、こういう順序になるのではないかと思います。
次回はもっとも難しい前提についてお話ししたいと思います。
今日は「前提を問え！」です。・・・
皆さんすでに前提に乗っかっていますよ。
「前提を問え！」ですからここでは、その前提を問わなければいけない。
ところが皆さんは「前提」という言葉を何か分かったものとして前提していますね。
また「前提を問うことができる」ということも前提してしまっています。

実はこの「前提に乗っかる」というのは人間の癖のようなもので、やめられないものです。
続きはまたこんど。

付記
　大学生を教えていて実感するのですが、この「前提を問う」ということはことのほか難しいようです。大学生に「三角形の内角の和は何度？」と訊きますと、まあさすがに「180 度」と返ってきます。ところが「なんで？」と問い返すと目を白黒させる。さらに問い詰めると「先生に習ったから」と来る。「じゃあ、先生が 360 度だと言ったらそのまま信じるの？」というようなやりとりが続くことになる。分度器で測るという発想が出て来るまでにずいぶん時間がかかる。でも分度器で測っても正確な数値は出てこないという注意を与えてから、「証明」という言葉が出て来るまでにこれまた結構な時間がかかる。それで大学生にその証明をさせるのですが、まあ何とか平行線の性質を使って証明して拍手喝采となる。ところが「この証明で正しいとして前提に用いていることがあります。それは何ですか。」と尋ねると、これが結構難しい。要するに「前提を問う」という思考の訓練をしてきていないのです。あるいはすっかり忘れてしまったのか。少なくとも身についていない。
　私が「この講義の目的はともに哲学することを通じて教養を養うことです」などというと、何の疑問もなく受け入れてしまう。ここには個々の単語の意味が分かったものとして

前提されていることとは別に、「ともに哲学することによって教養が養える」ことと「教養が養われねばならない」というちょっと考えて見ただけでもいかがわしい前提があるのに、まったく気付くことができないのです。「個々の単語の意味以外に前提しているものがあるよ」と言っても分からない。まずまともな答えが返ってこない。日常生活では前提を問うていたら生活ができないにしても、学問の世界では前提を問うことなしに、何の疑問もなくすーっと通り過ぎていては学問にはなりませんし、人間が深まることもありません。